

## 2011 年度後期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 篠原光伸

後期学生授業評価アンケート調査の対象科目数は 264 科目であり、そのうち 213 科目から回答を得られた。調査対象は後期開講科目と通年開講科目である。前期の同調査対象科目数 46 科目（回答科目数 45 科目）からは大きく増加している。調査対象科目の全履修者数 9,562 名（前期：2,650 名）、回答者数 5,060 名（前期：1,570 名）、回答率 53%であった。

「出席率」については、「90%以上」とする者が 2,784 名（60%）であり、アンケート項目毎のスコアの平均値の中でも、4.43 ポイントと最も高い。受講者の出席率は非常に良好である。では「授業中、意欲的に取り組んだか」をみると、教室にて受講者の 8 割弱に相当する学生が、意欲的に取り組んだと回答しており、大多数の受講生が学期を通じて高い修学意欲を持ち続けていることは、学部全体としても大変好ましい状況にあるといえる。

次に教員側の講義への取り組みについての評価をみると、授業時間の有効利用を評価する者は 3,993 名（82%）であり、教員の休講や遅刻の多さについても、少ないと評価している。教員の話し方については、受講者全体の 4 分の 3 に相当する学生が、明瞭との評価をしている。板書・スライド等の文字の読みやすさについても、約 7 割の学生は特段の問題を感じていないようである。授業レベルについては、受講者の 3 分の 2 が適切なレベルであると評価している。教室内環境に関する質問では、節電の影響による教室環境の悪化が懸念されたが、約 8 割の受講者が教室内環境を評価していることから、実態として特に問題は発生しなかったと判断される。授業に対する教員の熱意については、高い評価をした者は 3,926 名（81%）であった。本学部の教育内容は他にはないオリジナリティーに富むが故に、教員も自らの担当科目により多くの情熱を注いでいる。その情熱を受講者の 8 割に当たる学生が、教室の現場で体感しているといえる。教員側が充実した授業を行い、受講者側は授業へ意欲的に取り組む、という教室内での好循環が感じられる。教員が発言・議論等授業参加を積極的に促したかをみると、高い評価を与えた者は 2,892 名（59%）であり、設問毎のスコアの平均値でも 3.67 ポイントと低く、しかも、すべての設問の中で評価分布に最もバラツキが見られた。性質の異なるタイプの授業が混在している結果といえる。シラバス内容と授業内容との整合性について高い評価をした者は 3,726 名（77%）であり、逆に相対的に低い評価をした者は僅かに 125 名（3%）であった。シラバス内容と授業内容の整合性については、特段の問題がないと判断される。当該分野への関心と学力が得られたかでは、受講者全体の 8 割弱に相当する学生が、授業による修学効果を自覚している。授業の内容、授業の質が、受講者の興味関心を生み、惹いては学力向上と直接的に結び付く。本学部では学生の期待に十分応え得る良質な授業が展開されており、それにより学生は知的満足感が得ているものと考えられる。

最終的な「授業の総合評価」に関しては、受講者の 8 割が本学部の授業に高評価を与え

ている。この総合評価と相関の強かった項目は、先に挙げた「当該分野への関心と学力が得られたか」(相関係数：0.77)、「教員の熱意」(相関係数：0.67)、「教員の話し方の明瞭性」(相関係数：0.64)、「授業レベルの適切性」(相関係数：0.62)である。

さて、予習・復習の状況については、回答スコアの平均値は 3.07 であり、全設問中で最も低いスコアであった。この傾向は前期の授業評価アンケートでも見られたが、やはり、大学の勉強は講義内容を専門書で調べ、自分で考えるプロセスは必要不可欠であろう。従って、教える側も漫然と受講させるのではなく、講義内容の本質に迫る多少難しい問いを投げ掛けるなど、より深い授業理解を導くことが望ましいであろう。